

## シリーズ

## 豊中駅前の歴史を振り返る

第7回 刀根山道の今・昔  
その5 "昭和30年代を振り返る"

このシリーズは、豊中駅前がどのように形成され、変遷を重ねてきたかを振り返り、これからのまちづくりに活かしたいと考え企画しました。

今号からは、戦後から今に至る一番街や刀根山道の

変遷を辿ります。今回お話を聞かせていただいたのは、新免会(旧新免農業実行組合)世話人の山本正一さんと土橋房治さんです。

—— 前号で辻本さんから、刀根山道の西側は強制疎開した家を潰して道を広げたとお聞きしたのですが、一番街の方は、どうだったのですか？  
【土橋】終戦直後は、今の半分ぐらいの道幅でした。今の広さになったのは昭和25年位だったと思います。白井さんのお家(現在の西川ミートショップやナカザワカメラがある場所)は、後退するにあたり、丸太を転がし、家屋を横に並び替えるといった工事(曳家)が行われました。その際近隣のお家も、同じ方法で配置換えして道を広げたと聞いてます。詳しくは、どなたかに聞いて貰えばと思いますが、その頃に今の道幅になりました。

—— 道幅が広がってから、今の賑やかな商店街が徐々に形成されていくのですね。

【山本】昭和30年頃が一番街は、今のよう店舗が建ち並び商店街と言った感じではなかったと思います。駅前の方は戦前からの店が並んでいました。木村屋のパン屋の横には電気屋、蒲団屋など数軒が並び、向かい側には一時パチンコ屋がありました。その並びに自転車屋、建材店、住宅、牛乳屋、道を挟んで私の住まい(現ルミエール豊中)となるのですが、向かい側は住宅が多く、さほど店も無かったように思います。光源寺に行く道

の角には酒屋さんがありましたね。よく話に出て来る丸正もありました。丸正の横に北に向かって「東新地」と呼ばれていた通りがありました。その両側には結構沢山のお店がありました。入り口には農機具や種苗などを売るお店、お菓子屋、雑貨屋、肉屋などが並んでいました。肉屋の角を曲ると料理屋がありました。その隣がピリヤード、小さな旅館(今のビジネスホテル)、製麺所が続いていました。今のポゼムビルとコインパークとの間の路地ですね。戻って、肉屋の向こうには、洋食屋、一品料理屋、中華料理屋、スタンプバーなど、飲食店が軒を並べていました。ジオ1300がある辺りです。突き当りが今のユニバーさんの所になるのですが、それも昭和30年頃に出来たと思います。



現在の「ルミエール豊中」付近

—— 刀根山道について、もう少しお聞きしたいのですが…。

【山本】千里川から駅に向かって、山本の米屋さんの所までは竹藪でした。坂を上がって右側には銭湯(いなり湯)がありました。その頃は家にお風呂のある家も少ない時代だったので、良く流行っていました。その辺りから和楽さんまでの間には自転車屋、呉服屋、お好み焼き屋、和菓子屋など、今あるお店はその頃からあったと思います。確か「刀根山中央商店街」と呼ばれていたと思います。

一番街の方は、最初、松浦さんやシスター薬局の村上さんなど数軒が集まって親睦会(五月会)を作り、それが「刀根山商店街」となり、今の「豊中駅前一番街商店街振興組合」になって行く訳ですが、この辺りのことはもっと詳しい方に聞いてください。

—— 今日のお話をお伺いし、駅前の人工広場もバスターミナルも未だ無い、新開地も昔の市場だった昭和30年頃の刀根山道の様子が良く判りました。

次回は昭和30年代から平成になるまでのお話を聞かせて頂きたいのですが、【山本】判りました。変遷に詳しく知人が大勢いますので、紹介します。

(2008年9月10日聞き取り)

お二人の  
プロフィール

山本正一氏: 昭和16年生まれ。昭和34年より自宅で豊中モータープール創業(現ルミエール豊中)一番街商店会会長、新面農業実行組合代表を経て、現在本町9丁目自治会長、大池地区民生児童委員、大池公民館運営委員長  
土橋房治氏: 昭和15年生まれ。本町3丁目在住50余年、金融機関退職後稼業の不動産業を引き継ぐ。

シリーズ「豊中駅前の歴史を振り返る」は『まちづくりニュース』に掲載しています。①Vol.8 ②Vol.10 は松浦幸夫氏③Vol.12 は辻本くに子氏④Vol.14 は村中勇夫氏⑤Vol.16、⑥Vol.17は辻本龍男氏にお話をうかがいました。

※ バックナンバーをご希望の方はお問い合わせください。(06-6858-6190)